



個展「ココ△(さんかく)」では、色も形もとりどりの作品が並んだ。「固定概念やルールを崩していくのもアーティストの役割だと思っているのですが、そういえば、なんで今まで四角だけだったんだろう」と、今回初めて丸いキャンバスに描いた。遠野で暮らし始めて、発想がより自由に



メルヘンさんとユーモアを交えながら、遠野の人や風土への敬意を感じさせる作品たち。菅野さんのフィルターを通して、「遠野物語」の奥深さに魅了される



作品のインスピレーションは本からも。最近の菅野さんの愛読書



「ギャラリーは、入場無料で誰でもアートに触れられる空間。ぜひ、気軽に足を運んでもらいたいですし、若い作家を応援してほしいです」。そう話す菅野さんの個展では、子どもも大人も自由に展示を楽しんでいく



読者の中にユーザーも多いのでは。仙台市交通局が発行するICカード乗車券「icscsa(イクスカ)」のデザインを手がける。キャラクターのスズメは、伊達家の家紋「竹に雀」から

information

Instagram/maikokanno
Twitter/maiko_kanno_76

菅野麻衣子さんのほかの作品はこちら。購入もできる



tagboat



GALLERY SPEAK FOR

一度見たら忘れられない 印象的な目をした女の子

「あなたに似ている」。個展を訪れた女性がそう言うと、「似せて描いているつもりは全然ないんです。でも、自分の考えを投影しているの、この子たちの表情や感情は私自身でもあると言えます」と、菅野麻衣子さんは答えた。

吸い込まれるような目力を持つ女の子と、ストーリーのある構図が特徴の作品は、一度見たら忘れられない存在感がある。絶妙な色と質感で魅せるアクリル画芯の濃さやメーカーを使い分け、40本の鉛筆で描く鉛筆画。カラーとモノクロ、両極端の二刀流スタイルもユニークだ。

幼少期から絵を描くのが好きだった菅野さん。両親が集めていたおかげで、いろんな画家の画集が家にあった。中でもエドヴァルド・ムンク

好きを仕事にするために 大事なのはやめないうこと

高校は富谷から片道2時間かけて、美術科のある宮城野高校へ。家に帰ると疲れて寝てしまうから、放課後は学校でデッサンの練習をし、泉

に惹かれ、作品の核になるテーマで影響を受けているという。代表作の『叫び』が死の恐怖を描いたともいわれるように、生きるをテーマに感情を生々しく描いたムンク。画集の年表を見ると、家族の死などの出来事が作品に影響しているのも興味深かった。「自分の人生を絵に描くって、いいな。そういう画家としての生き方を菅野さんは選んだ。

日々感じた思いや疑問を表現するうえで、女の子をモチーフにするようになったのは、東北生活文化大 学生活美術学科在学中から。顔つきは変化しているものの、なぜ子どものまま止まっているのか。そもそも何歳なのか。はっきりとしたことは、菅野さんにもわからないようだが、長い付き合いの良き代弁者である。

中央のカフェやファストフード店で受験勉強をしてから帰宅。画材を抱えながら通った泉中央駅は、青春時代の思い出の場所だと語る。

好きなことを仕事にするのは簡単ではない。ましてや芸術の分野は、就職してなれるものでもない。明確な道筋はわからない中、菅野さんが大事にしたのは、「絵を描いて発表するのをやめない」。大学卒業後は3年間、専門学校で美術教員として働きながらも、学生時代から毎年続けてきた個展はやめなかった。

教員を退職後、貯めたお金で一カ月イギリスへ留学。ギャラリーを回りながら作品を見せたり、ポストカードを配ったり。初海外にして行動力ある種まきが実を結び、イギリスでアートフェアに出展できるチャンスを手に入れた。そこで自分の絵が売れて自信がついたと話す。

数年後には、仙台市のICカード乗車券「イクスカ」のデザインを担当。地元で手がけていると話題になり、メディアで取り上げられる機会も増えて一躍有名に。

巻頭特集

イクスカをデザインした富谷出身の画家 少女を通して描かれる 菅野麻衣子の世界

女の子をモチーフにした作品や仙台市のICカード乗車券「イクスカ」のデザインでおなじみの菅野麻衣子さん。知る人ぞ知る宮城県出身の画家だが、実は、高校生まで富谷で暮らしていた富谷っ子でもある。3月、コロナ禍で2年ぶりとなる個展を開いた菅野さんに会いに行ってきた。

画家
菅野麻衣子さん

かんのまいこ。1983年生まれ、富谷町(現在は富谷市)出身。富谷第二中学校、宮城野高等学校、東北生活文化大学を卒業。仙台、東京、京都、イギリス、ロサンゼルスなどで展示を行い、国内外にファンを持つ

そうして近年では、画家一本で生活ができるようになった。「作品を買うことで支援していただき、また新しい作品を生み出すための時間をもらっています。今は、絵を描くことだけに熱中できている。ようやくです」と、安堵の笑みを浮かべた。

神秘的なまち遠野へ 菅野作品の新境地

2021年、菅野さんは岩手県遠野市に移住。移住後初となる個展が、3月19日から27日に仙台市の中本誠司現代美術館で開催された。16日に起きた地震の影響で、県外のファンが来られなくなった中、地元にいる友人や家族の応援が、いっつも増してうれしく感じたという。

遠野は日本民俗学の聖地といわれ、今も語り継がれる逸話や伝承がある。同展では、それらをまとめた柳田國男の『遠野物語』をはじめ、自然豊かな風景や文化から着想を得て描いた新作を約40点披露した。右ページの作品は、鹿と女の子が指切りげんまんをしている。遠野では、自

然と人間は対等な関係。そんな間柄を同級生に例え、学生服を着せているのが菅野さんならではの。

オシラサマと呼ばれる蚤の神を信仰する人々の風習をもとに、手を振る、手を合わせるなどの所作も度々登場。遠野から深い影響を受けているのがうかがえる。展示を通して、自分の神様について考えてみたという菅野さん。「私だったら何に手を合わせて拝みたいか。それは、明かりがついた家だなんて思うんです」。

柔らかい雰囲気をもとにしながらも、芯の強さを感じるまつすぐな目。子どものような心で愛するものを持ち続けている菅野さんは、本当に絵の中の少女たちみたいだと思っ

今号の表紙は、故郷である富谷市と泉区の読者へ菅野さんからのギフトだ。魔よけのモチーフ五芒星に、目(穴)があるから悪魔が逃げるといわれるザルをドーナツにかわいく置き換えた作品『守りの△』。遠野市立博物館で見たまじないの展示に影響を受けて描いたものだろう。長引くコロナ禍や新年度のお守りに、どうぞ。